

直方ミニバスケットボールクラブだより

新型コロナウイルス感染のもう一つの問題 ～「コロナ問題」が「人権問題」に～



感染症が人の差別行為と結びつき、さらに重い病となっています。同調圧力、いわゆる「自粛警察」行為、感染者への誹謗中傷、差別行為等。医療問題に人権問題が重なり、重い社会的病となり、さらなる犠牲者を生んでしまうことにもなりかねません。学校では、ハンセン病問題、水俣病問題を学ぶとき、社会問題、人権問題として学びます。今回の新型コロナウイルス感染症問題も同様なところがあります。新型コロナウイルス感染の問題は、感染そのものの医療的な問題は当然ですが、それ以外にも経済問題、人権問題など、社会は重い課題を背負わされています。

新型コロナウイルス感染者への誹謗中傷、差別行為が横行しています。確かに感染対策を無視したような行為、行動をとる人の姿が報道されると、多くの人がそのような行為、行動をとっていると惑わされてしまうでしょう。しかし実際には、大多数の人は感染しないように対策をとりながら、一方で、日々の暮らし（生計）を成り立たせるために仕事に励んだり、心身の健康を保つためにリフレッシュする活動をしたり、最小限必要な日常生活のサイクルをまわしています。それはおとなだけでなく、子どもも同様です。学校もバスケットの活動もそのなかの一つでしょう。ただし、一定程度おとながコントロールしながら、感染防止対策としての行動と日常生活に支障をきたさないための行動を、バランスをとりながらまわしていますね。

感染状況を見てみると、確かに感染対策を無視したような行為、行動で感染している人もいますが、可能な限り十分に感染防止対策をとっていたにもかかわらず感染してしまったというケースも見受けられます。市中感染の段階に入っている状況では、いつ、どこで、だれがかかってもおかしくないでしょう。にもかかわらず、感染した人たちを攻撃する行為が横行しているのです。あたかも自分が正義であるかのように…。感染者の家族にまで誹謗中傷するような情けない行為が行われています。攻撃している人だって、いつ感染するかもわからない状況です。もし自分がかかったら…と考えれば、そのような行為はとれないと思うのですが…。思考の範囲が狭く、自分のことだけ、目先のことだけしか考えられなくなると、そのような行為をとってしまいがちです。

人は、問題が身近に迫ってきたとき、わが身にふりかかってきたとき、最もその人の人間性が問われる場面になります。

報道でもあるように、感染状況が明確になることの方が、感染予防対策はとりやすく、みんなにとってもその方が望ましいはずですが、現実には、感染したことを隠さな

ければならない状況になってないでしょうか。本当はちゃんと言いたくても、差別があると言えなくなるのです。私は、長く同和教育、人権教育に携わってきて、そのことを学んできました。

この世の中に、差別されていい人なんていません。差別していい人もいません。何か問題があれば、それぞれが知恵を出し合って、よりよき方向に向かっていけるよう、助け合い、支え合いながら、ともに解決策を講じていくことが大切です。

福岡県内の感染者は、また増え続けています。直方市でも感染した人がいます。私が感染するかもしれません。自分の身近な誰かが感染するかもしれません。もしかしたらすでに感染しているのかもしれません。私も含めて多くの人は、PCR検査を受けられていないのですから、感染しているのかどうか分からないのです。そのような状況のなかで、私も含めてどなたかに症状が出て、検査を受けたら感染していたということが判明しても不思議なことではありません。もしそうなったら、濃厚接触者や関係者には必要な措置がとられるわけですが、このような状況下にあっては想定内のこととおかなければなりません。感染した人を責めたり、誹謗中傷したりすることではないですね。「治療をして、完治させて、またいっしょにがんばろう」と言える関係でありたいですね。

6月、体育館利用が許可されて以来、約1か月半、感染防止対策は講じながら活動を続けてきていますが、常に感染リスクはあり、もしここでだれか感染者が出たら...、ということはいつも頭の隅にあります。それは学校の先生方も、社会で仕事をされている方たちも同様でしょう。もし感染者が出ても、互いが傷つけ合うような対応ではなく、助け合い、励まし合う行動をとれるおとなでありたいですね。クラブでも、日常活動を通して、互いを気にかけて、あたたかい関係でつながり合うことを子どもたちにも求めています。私たちおとなは、そのモデルとなっていきましょう。

